
単なるブックス未来屋酒田店

ゆっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

単なるブックス未来屋酒田店

【ISBNコード】

N8446Z

【作者名】

ゆつち

【あらすじ】

この世に本屋が嫌いな人は存在するのだろうか。

田舎にある「ぐごく普通の本屋、ブックス未来屋酒田店。

毎日、ダラダラと過ぎていく店員達に、予期せぬ出来事が！？

超個性的な店員達が繰り広げる単なる日常の勤務風景・・・なのかな？

?

果たして本屋を嫌いな人が、世の中にはどのくらいいるのだろうか。

本屋に行くと便意が治まらなくなるとか、前世がヤギで紙を見ると無性に食べたくなるとか、そういう病的な症状がない限り、みんなにとって本屋は好きな場所の1つではないのだろうかと思っている。

コミックやティーンズ文庫の棚の前では、みんなニヤニヤと実際に楽しそうに笑いを浮かべながら立ち読みしているし、

女子高生達はギャル系雑誌を見ながら

「ちょっとこれ超可愛くない? マジヤバイって~」

と、一体何がマジヤバイのか聞いてみたくなる会話をしている。

老人男性達は元気に官能小説を吟味、おば様達は嬉しそうに韓流コナーで雑誌を広げながら、

『このドラマは面白かった』『この俳優がお気に入りなの』と女子高生顔負けにキヤツキヤしながら立ち話したりと、みんな個々に本屋を満喫してるように見える。

最近では、パソコンやケータイで本が読めるようになつて、本屋で本が売れないと言われているがそんな事はない。

みんな本屋が好きなのだ。だから本屋はなくならない。私はそう思つてゐる。

そんな私の搖ぎ無い定義が、まさか根底からひっくり返らうとして

るなんてこの時はまだ知るよしも無かつた。

上仲沙和 19 歳。高校を卒業してすぐにこの『ブックス未来屋酒田店』に就職した。

丁度良く従業員を募集していたので応募したらなんと受かってしまった。

他多数の応募者を蹴落として、私が採用されるだなんて奇跡というべきか、18歳にして運を使い果たしたといつべきか、いやいやそうじやない。

店長の人を見極める目が超一流だつたに違いない。

10キロ先のチーターの交尾ですら多分見えるであろう、その目で『この子は何かを持っている』

そう思つたに違いないのだ。上に立つ者、人を見極める目がなければ店長など勤まる訳がないではないか。

ま、私を採用してからの店長の口癖は、私がミスする度に『人選を間違つた、人選をミスつた、俺には人を見る目が全く無かつた』

を連呼するようになつたが、私はあえてそこには一切反応せず確實に聞き流すテクニックを身に付けた。

それもまた一つの成長の証。私はそう自分を自分で評価している。

店の開店時間は10時。私達は9時までに出勤する。今日発売の雑誌を開店時間までに店出ししなければならないのだ。

本を並べながら、『この本面白そうだな～よし、買って帰ろうと』といち早く品定めができるのが本屋で働く者の唯一の特権だつたりする。ま、特権などそれぐらいしかないのだが。

「おはよ／＼」咲真が笑顔で言つた。
「あれ？ 咲真さん今日出勤でしたっけ？」
私が裏口から店に入ると、咲真さんがパソコンを見ながらコーヒーを飲んでいた。

土門咲真じめなな 20歳。かなりのイケメンで高身長。手足の長いハ頭身だ。

いつも爽やかで、咲真さんの笑顔にキュンとしない人はいないと思う。

手芸・料理等の担当をしていて手先はとても器用らしい。

「沙和っち、おはよう。なんか稀一さんからメールが来ててさあ、今日朝礼で重大発表があるから全員出勤するよ！」って。

そんなの電話でいいじゃんかなあ、電話でさあ。

あーあ、せっかくの休みなんだから、もつとゆっくり寝てたかったのにな〜」

咲真さんはパソコンをいじりながら「ブツブツ」と文句を言つてゐる。
稀一さんというのは店長の事だ。

ふうん。重大発表があ…なんだろう。店の改装とかかなあ。稀一さんの電撃結婚とかではない事は確かだらう。

私はタイムカードを押す。

「咲真さん、今日デートの予定とかないんですか？」
私は二ンマコしながらちょっと聞いてみた。

「そうそうー。姉貴と出かけるんだ。姉貴がどうしても中町のジョラードを行きたがって言つかりさー。一人で行かせるのって可哀想じやん？」

女一人でアイス食べるだなんて、そんな姉貴の姿想像しただけで涙
出てくるじゃん。だから一緒に食べに行つてあげるんだ」「
咲真さんは嬉しそうに答えた。

女一人でアイスが可哀想? 私なんて、いつも独りで牛丼食つてます
けど?

喉まで出かかつたがグッと呑み込んでみた。

ああ、そうだった。咲真さんは姉貴大好きなシスコン男だった。聞
かなきや良かつた、あーあ、失敗。

私は自分で話題を振つておきながら最高に不愉快になつたので、咲
真さんの話を聞かなかつたかのようにスルーしてみた。

颯爽とロッカーを開けて荷物を放りこむと、中からエプロンを取り
出して装着した。

そして足早に事務所から出ようとしたその時、突然トイレから青登
さんが勢いよく飛び出してきた。

みづらあおと
三浦青登 21歳。耳にピアスを開けてデニムをこよなく愛する、咲
真さんとはまた違つたタイプのイケメンだ。

手首には常に皮のブレスレットをはめていて、外すとなぜか力が出
ないんだそうだ。

お前はアンパンマンか?といつも突つ込みを入れたくなる。

青登さんの担当は幼児・育児・ペット等。

外見からは想像がつかないが、実は物凄く子供や動物が好きらしい。
家で飼つていてる犬を溺愛していて、病気になった時には1週間仕事
を休んだ。

人は見かけで判断してはいけないとこの歩く見本のよつた男である。

「わっ…ピックしたつー青登さんも来てたんですね、おはよい！」
「やこま…」

全部を言つて終わらないうちに青登さんは私の手を握りしめて叫んだ。

「下痢が止まんねえんだよ、沙和ちゃん…！」

「…そ、うなんですか。で、手は洗つたんですね？」

「あーもう、昨日サクランボ食いすぎちゃつてさあー。だつてさあ、山形県民たるもの、そこにサクランボがあつたら食つだろ普通…！そこには山があつたら登ると同じように…！なあ、沙和ちゃんそう思つだろ？それが男…！それが日本男児…！山形男子…！男がチャレンジ精神をなくしたらそこで終わりだし…！」

一体何のチャレンジ精神だ。つてか、山形男子、つてどんなんだ？

「昨日サクランボ狩りに行つたんだつてや。お土産のサクランボ冷蔵庫に入つてるつて」
咲真さんが「一ヒーを飲みながら書い。

「やつなんですか。で、今、この手は洗つたんですね？」

私にとって一番の重要なポイントは、下痢の原因がサクランボという事ではない。そんなのどうだつていい。むしろ知りたくもない。私が知りたいのは今現在、私の手を握つてるこの青登さんの手が清潔かどうかだ。

「あ、手洗つの忘れてた。」

青登さんは私の手を離すと、洗面所に手を洗いに行つた。

「ああ、やはりそうか。恐れていた事が現実になってしまった。

私は手を硬直させたまま青登さんの背中を鬼のような形相で睨んだ。

「あ、沙和ちゃんも洗った方がいいよ。俺の下痢菌がついてる可能性100%超え」

「言われなくとも分かつてますよ！」

私は青登さんを押しのけると勢いよく手を洗つた。

「でもさー、この歩くビフィズス菌と呼ばれてる俺がさあ？下痢になるだなんて、なんか不吉な予感がするんだよね」

青登さんが不安そうな顔をして言つた。

歩くビフィズス菌の意味が分からぬ。つていうか、単にサクランボの食いすぎでしょうが。

「ねえそつ思わない？沙和ちゃん

「思いません」

私は一言ハッキリ言い放つとスタスタと事務所を出て行つた。
まったく青登さんは。

私は深いため息を一つ付いた。

私が店内を歩いて行くと、レジの所に苑子さんが立っていた。

渡瀬苑子20歳。生糀のお嬢様で近年までは外国で暮らしてたとい
う帰国子女だ。

働くかなくても生きていけるらしいのに自分で働いてお金をみて
いという強い希望により、ここに就職したようだ。親の強い圧力で。

見た目は少しウェーブのかかった品のいい茶髪でスタイル抜群。とてもおつとりして優しくて、目がクリツと大きくて凄く可愛らしい人だ。

出勤時はいつも大きな黒い車で優雅に送迎されてくる。勿論退社時も同じだ。

ドラマでしか見た事のないような立派な車なので、そこにいる誰もが驚いて振り返るほどだ。

でも苑子さんは自分の裕福さをまるでひけらかさない素敵な人。ま、かなり天然入ってるのが玉にキズだが、それもまた許せるぐらい可愛らしい人なのだ。

資格・参考書等の担当をしている。とても知的で頭がいい。

「苑子さん、おはようございます。何やつてるんですか？」
私は苑子さんの所に歩いて行く。

「あ、おはよう沙和ちゃん。私ね、早く来ちゃったものだから、N HKのドイツ語講座とフランス語講座の復習をしてたの。で、それが終わつたから今から中国語に取り掛かるうと思つてた所なの」

苑子さんの手元には、私物と思われるテキストが山のように積まれていた。

「ただけこの時間を利用して勉強する気でいたんだろう。
つてか、一体何時で店に着いたんだ…？」

「沙和ちゃんもやってみる？中国語。ホラ、いつ急に本場の餃子が食べたくなるか分からぬでしょ？う？ねつ？」

いえ、急にそんな気持ちにはならないと懇つて結構です。つてい
うか、もし例えなったとしても、近くのコンビニに行くかのような
軽い感覚で中国へ餃子を食べにはいけません。」じくじく普通の庶民
なんで、私。

ジョーダンとかではなく、本氣で言つてから恐ろしい。それが苑
子さんだ。

「おはよう」「おはよーす

向ひから、祭が小走りに走つてくれる。

「おはよう、祭ちゃん」

「おはよう、祭」

私と苑子さんは手を振つた。

なかがわまつり
中川祭 18歳。長い黒髪のストレートでキレイな顔立ちの子だ。一

見、気が強くて物怖じしないタイプに見えるが、実際は物凄く恥ず
かしがり屋で特に男性が苦手で田を見て話す事もできない。
しかし怖がりのくせに空手初段の腕前で、口よりも先に手が出てし
まう。

文芸書・文庫担当で、文学にはとても詳しい文武両道な女の子だ。

祭は、私達の隣まで来ると

「事務所に責任さん達が居てビックリしました。」

恥ずかしそうに少し赤くなつた頬っぺたを手で押さえながら言つた。

「朝、大事な話があるから全員集合するよつて店長から言われ
たみたいなの」

苑子さんが答えた。

「なんか青登さんが、下痢だ不吉だ不吉な下痢だ、とかつて何回もしつこく言つもんだから、思わず顔面殴つちゃつたんですけど、良かったでしょうか」

祭がすまなそうな顔をして言つ。

「うん、いいと思つわ」

「全然問題なし」

私達は笑顔で答えた。

急に、店の表の窓をドンドン叩く音が聞こえてくる。私達は一斉に振り返ると、そこには太郎が変質者並みの恐ろしい形相で立っていた。

「も、物凄くキモイんですけど」

祭もまた物凄い形相で太郎を見つめて言つた。

小谷太郎

19歳。

こだにたるう

自称ラストサムライと言つているが、単に頭の悪い…イヤ、頭の固い硬派な男だ。女所帯で育つたせいか、女にはめっぽう弱いというか、いつもビクビクと怯えている。お姉さん達にどんな扱いを受けてきたのが想像できて同情したくなる。

「ミックを担当してるので、ティーンズ文庫担当の私とは何かと関わることが多いせいか、私とは普通に話せるようになつた。硬派ぶつてるくせにかなりツンデレ度は高いと見ている。

外見は男らしい体育会系なのだが、運動能力はかなり低い。毎回遅刻ギリギリで駐車場から一生懸命走つては来るが、一向に前には進まないタイプだ。要はドンクサイ。

全く…また今日も遅刻ギリギリか。

私は不機嫌な顔をしながら玄関のカギを開けてやつた。

太郎はハアハアと肩で息をしている。

「悪い。 その道路をだな、カルガモの親子が横断しててだな、それがまた10羽以上連なつてて、しかも最後の一羽がイキナリこけて、しかもそいつが…」

「はいはい、分かつたから早くタイムカード押してこないと遅刻だよ」

「あ、うん、すまん」

太郎はダッシュで事務所に駆け込んで行つた。

「相変わらず足遅いわよね」

「っていうか、本当にキモイです、あの顔」

苑子さんと祭が、太郎の走つていく後ろ姿を見つめながら呟いていた。

「稀一さん、来ないねえ」

苑子さんは、中国語テキストをしながら言つ。

「ま、あの人は時間通りに來た試しがないですもんね
祭が外を見ながら言つた。

と、その時バイクの音がけたたましく聞こえてきた。

「來たみたいだね」

「じゃ、私、咲真さん達呼んできます」

私は事務所に走つて行つた。

稀一さんはハーレーで出社するので、來たら音ですぐに分かる。店長らしからぬキャラキャラした外見と態度なのだが、そんな自由奔放な上司だからこそ私達も自由に仕事ができるのかもしれない。

二神稀一 26歳。 この若さで店長に抜擢されたのだから、きっと凄

みかみきいち

い人なんだろう。——（と、思いたい）

アメリカ人になりてえ、が口癖で、同じくアメリカかぶれの青登さんと、いつもアメリカンドリームについて熱く語っているが、二人共一度もアメリカには行った事はない。

店長とはいえ経理事務も完璧にこなし、本という本の全ての分野に詳しいので凄く頼りになる存在だ。

「おーい、朝礼すんぞー」

稀一さんは、玄関から入つてくるなり大きな声で叫んだ。

今日も派手なアロハシャツを着ている。それで仕事する気なのか。私達は稀一さんの前にゅっくりと一列に並んだ。

?

稀一さんは腕組みしながら私達の顔を一人一人じっと見つめる。私達も稀一さんの顔をじっと見つめ返した。

しばらくそのままの状態で沈黙が流れる。すると突然稀一さんが今までに見た事もないような優しげな微笑みを浮かべた。

それを見た私達はビクッとして、みんなその不気味な微笑みにクギ付けになつた。その状態でまたしばらく時が過ぎた。

何だろう、この無駄な沈黙。しかも、何このキモイ笑顔。バイクで事故つて頭でも打つたのだろうか。

私はゴクリと1回生睡を飲んだ。

チラッと隣に立っている太郎を見ると、太郎も私の方をチラッと見ていた。

「かなりキモイな……」

太郎が小さい声で呟いた。私は小さく頷いた。

向こうでは咲真さんと青登さんが

「お前、コレなんとかしろよ……」

「お前こそ、この状態何とかしろって

お互いを肘で突き合つている。

その時、イキナリ稀一さんが肩の所で両手をグーに握ると

「みなさま～ん。おつはー」

そのグーにした両手をパツと広げた。

みんなは余りの衝撃に身体を後ろにだけ反らせた。

「ああ、みんなも」一緒に。おっせーーー！」

また手をグーにしてパツと広げた。

「お、おっはあ…」

私達は、言われるままに恐る恐る稀一さんと回じみつて手を開いた。祭だけは、あまりの恐ろしさで口にならへて黙りとも動けなくなつている。

なんだね？、この妙なハイテンション。恐ろしい…實に恐ろしくなる…。

私達は怯えきつていた。そんな私達を尻田に稀一さんは更にこれ以上ないつてほどの笑顔を向けながら

「道せんじ」報告があつまーす。実は、この

未来屋ブックス酒田店は、なんと閉店リストにノミネートされちゃいましたーーー！」

最後まで妙な微笑みを絶やさずこに一気に言い放つた。

わづかのおっせーーも、もの凄い衝撃だったが稀一さんの口から出た言葉は、それ以上の衝撃を私達に与えた。

「閉店リストにノミネートされた店は、一年以内に確実に閉店となりまーす」

「なつ…なんで急にそんな事になるんだよ、稀一さん…！」

青登さんが叫んだ。

「しゃーねーじゃん。こないだ行つた本社の会議で言われちやつたんだからさあ。」

「

稀一さんは、近くに置いてあるアイドルの写真集をペラペラと弄りながら言った。

「俺だつてマジびっくりしたつづーの。イキナリ、売上が悪い10店舗は閉店対象とします、みたいなさあ。

半分寝てたのに飛び起きたつづーの。うちの店ハンパなく売上げ悪いもん。確実にその10店舗に入つてたし。」

稀一さんは写真集のアイドルの胸の所をなぞりながら愚痴つた。

うちの店はチーン店で、全国各地に100店舗以上出店している。その中で売上ワースト10店舗の中に、うちの店が入っているらしい。

「でも、だつて結構入ってるじゃないですか、うちの店…」
クだつて凄く売れてるし

太郎が必死で訴える。

「それはそなんだけどさあ。うちも売れてるけど他の支店はそれ以上に売れてたつて事じやないの？」

大体ホラ、うちの店の近くに古本屋が出来ただろ？ あれがまずかつたわ。あれが出来てから更に売上落ちたしな

稀一さんが淡々と話す。

「じゃあ、俺達みんなクビってわけ？」

咲真さんが言づ。

「ま、そういう事になるわな
がーん…。

クビ。せつかく仕事も覚えて毎日楽しくやつてきたところに、ク

ビ。

ああああ。おしつこ漏れそう。
私達はみんなガックリとつなだれた。

「やっぱ朝の下痢は不吉な下痢だつたんだ！俺は歩くビフィズス菌
だつたのに！ああ、また俺のビフィズス菌が暴れだしたようだ、
お腹が…お腹があ…！」

青登さんがお腹を押さえてうずくまる。

俺は歩くビフィズス菌だつた、つてお前はいつから菌だつたんだ？

「ま、決定までもう少し期間があるから、例えば…例えばだよ？そ
れまでの間に売り上げがこうウナギ登りに上がつていけば、閉店は
免れる…かも知れないけどな」

稀一さんは腕を斜めに上げて、ウナギ登りを表現する。

私達は全員、その稀一さんの伸ばした手の先を眺めていた。

?

勤務時間を終えて夜のバイトの子達とバトンタッチしてから私達は店を出た。

うちの店の隣には元々おもちゃ屋の店舗があったのだが、今は閉店して空き店舗になっている。

それで、ある日苑子さんが休憩場所が欲しいと言いだし、家の二両親に頼んだようで、他の店舗が決まるまで、その空き店舗を貸してもらえる事になった。

そんな事を平気で頼める苑子さん家ってどんだけ凄い家なんだろう。苑子さんが同僚で本当に良かつた。

私達は店から出るとすぐにおもちゃ屋の中に入つて行つた。中は、レトロな雰囲気を醸しだした喫茶店のような空間になつている。ここにあるソファーや椅子、テーブル、家電等は全部苑子さんが持つてさせたものだ。

外から見えるとマズイので店内を半分にしきつて、奥の部分だけを使用している。

中に入ると、朝礼後に茫然としながら帰つて行つた咲真さんと青登さんが椅子に座つて待つていた。みんな個々に合いカギを持つている。

「おつかれ～」

青登さんが言つた。

「お疲れ様です、2人とも来てたんですね」

私と太郎は真ん中のテーブルを挟んで置かれている椅子に、青登さん達と向かい合つて座つた。

祭だけは、一人離れて壁際に置かれていたソファーにひょいんと座る。

苑子さんは、いつもみんなに美味しいコーヒーを入れてくれる。勿論インスタントではない。苑子さんの入れるコーヒーは、そこいらへんの喫茶店で飲む「コーヒーよりもずっと美味しいと思つ。

「どうする、これから」

咲真さんが言った。

「どうするって言われても、俺「コミック以外何も詳しくないし、頭も良くないし高卒だし資格も持つてないし雇つてくれるところがあるかどうか」

太郎が深くため息をついた。

「俺だつて、大学中退だもんね～だ」

青登さんが言つた。

「俺だつて同じようなもんだよ」

咲真さんは両手を頭の後ろで組みながら言った。

私だつて、高卒だし何も資格持つてないし、ただでさえ不景気なのに、私みたいな何の取り柄も無いようなのを雇つてくれる所なんか絶対にない。

せめてもう少し美少女だつたら良かつたんだけど、「ぐぐぐく一般的な顔立ちだし乳もこじんまりしてると…」ってそんなの関係ないか。

私もみんなと同じように深いため息をついた。

「そ、そんなん…」

いきなり祭が叫んだので、私達は一斉に祭の方を向いた。

「こっち見ないでください！」

祭が真っ赤になつて叫んだ。

私達は、一斉に視線を元に戻した。

「そんなっ…」

また祭が叫んだので、また祭の方を向くと
「だからこいつち見ないで！見ないで聞いてくださいーでないと殴りますよー！」

「分かったから早く話せって」

青登さんが今朝顔面パンチされた箇所を押さえながら言つた。

私達はまた視線を祭から外して、不自然に色んな場所に視線を向けた。

「そんなネガティブな事言つてないで、辞めないで済む方法を考え
たらいいじゃないですかー！」

祭のマトモな発言にみんなはビックリする。
でも、誰も祭の方を見ようとはしなかつた。見たら殴られそうな勢
いだからだ。

「そりだよ。まだ決まつた訳じゃないんだもの。何とかして売上げ
を伸ばすように頑張ればいいんじゃないのかな」

苑子さんが「一ヒーを持つてきてテーブルに置きながら言つた。そ
して祭には「一ヒーを手渡した。

「そりだよ。まだ決まつた訳じゃないんだもの。何とかして売上げ
を伸ばすように頑張ればいいんじゃないのかな」

苑子さんが「一ヒーを持つてきてテーブルに置きながら言つた。そ
して祭には「一ヒーを手渡した。

「そりだよ。まだ決まつた訳じゃないんだもの。何とかして売上げ
を伸ばすように頑張ればいいんじゃないのかな」

苑子さんが「一ヒーを持つてきてテーブルに置きながら言つた。そ
して祭には「一ヒーを手渡した。

私は、朝に稀一さんがしていたウナギ登りのジェスチャーを思い
出しながら、熱い「一ヒーを一口、口に入れた。

「お疲れ」

稀一さんが入つてくる。

「お疲れ様でーす」

私達はみんな声を合わせて言った。

「苑ちゃん、俺にもおいすいコーヒー入れてくれる~？」

稀一さんは炊事場の所で後片づけをしている苑子さんに一言呟くと、椅子に座ってる私をシッショッと手で追い払つた。

私は渋々自分の椅子を明け渡すと、代わりに稀一さんがドカッといこに座つた。

お前には口がないのか、口が。

一言、『座らせてください』とか、『自分年寄りなものですから足腰が弱くて…』とか何か言えってんだ。

私は軽く不満を持ちながらも、自分のコーヒーカップを持つて祭の隣に移動した。

「つけの店がああ、もっと売上げアップすれば閉店しなくて済む訳？」

咲真さんが稀一さんに聞いた。

「ま、そんな簡単な事じゃないんだけどな。

うちの場合、年間通してずっと売上げが悪かったからや、一過性的に売上げアップしてもまたまた扱いされて終わるんだろうしさ。その売上がこれからもずっと続く、っていう確証がない限りは難しいだろうな」

稀一さんは、ポケットからタバコを取り出す。

「あれ？稀一さん、禁煙したんじゃないなかつたっけ？」

苑子さんがテーブルに稀一さんの「コーヒー」を置きながら言った。

「禁煙？苑ちゃん、俺の辞書に禁煙と禁欲といつ言葉は存在しないんだよ。何人たりとも俺を禁ずる事はできない…なぜなら、俺は力スマ店長だからだ！」

稀一さんは椅子から立ち上がり、自信満々に高笑いした。

そのカリスマ店長の店が潰れそうってどういう事なのでしょうか。しかも禁煙はともかく、禁欲ができないって単なるエロいオッサンって事ですね。

私達は無視してコーヒーを飲んだ。

稀一さんは椅子に座りなおすと、タバコに火をつけた。

「ま、禁煙の話はどうでもいいとしてだな、この店を閉店させない為には、ワースト8位から15位になつたぐらいではダメだつて事。ないだろうな」

劇的に一気に売上げベスト10位に入るぐらいの勢いじゃないとさ。

このトカゲのしつぽ切り的な話は、全店舗に知れ渡っているから、他の店も今まで以上に必死になつてくるんだろうし、簡単にはいかないだろうな」

稀一さんはタバコを吸いながら言った。

「でつ…でも、頑張つてみなきや分からぬいやないですかっ！…！」

祭が壁に向かつて叫ぶ。

「なぜ壁に向かつて話してん？」

稀一さんが尋ねる。

「みんながこいつらを見るからです！…！」

祭は後の向きでソファへ正座をしながら囁んだ。

稀一さんはタバコを吸い終わると、持ってきたファイルを取り出した。

それをテーブルに広げる。

「うちの売上げを部門別に見ていくと、ノハッカとティーンズ文庫は結構いいんだよ。

これは全国の支店の中でもなかなかの上位の売上げだと思う。とりあえず、これはこのまま伸ばしていくとして、後は他の部門をどうするかだな。

実際、置いてる本に関してはどうも似たり寄つたりだからさ、要はどうやって客を増やすか、って事になるな」

私達は、テーブルに置かれてるファイルを覗き込みながら話を聞いている。

「とにかく、全国的に売上げがいい支店ってのは、ショッピングセンター内にテナントとして入ってる場合が多いんだよ。あとは大型スーパーが隣接してるとか、客が集まる要素のある店が周囲にあるつてのが最大の武器になる。

残念な事に、うちの店は立地条件としては最悪。市内から外れてるからここに来る客は限られているし、市内に住んでる奴らはショッピングセンター内の本屋に行くか、市内中央にある本屋に行くのが多いだらうしな。そういう客をいかにうちの店に来させるかが問題だな。」

稀一さんは、腕組みしながら真剣な顔で語っている。

私達は稀一さんの事をじーっと見ていた。稀一さんはハツと私達の視線に気が付くと

「なつなんだよ

焦つて叫んだ。

「イヤー、なんか稀一さん、いきなり店長っぽいなーと思つても
青登さんがニヤニヤして言つた。

「今まで一緒に働いてきて、こんなに真剣な稀一さんは初めてみた
ような気がする」「うるさい」と太郎も凄く感心して言つた。

「お前ら、俺をバカにしてんの?」

稀一さんはひきつり笑いしながら言つた。

「そんな事ないですよ、みんな真剣に聞いていますから」

苑子さんがにこやかに言つた。

どうすればお客様が来てくれるか。お客様が来るにどうすればいいか。それが分かれれば苦労しない一つ話だ。
私は色々考えてはみたが良案が浮かばない。

「よしー。」

青登さんがイキナリ立ち上がる。

何か名案が??

私達は一斉に青登さんを見つめた。

「明日から、沙和・苑子・祭は全員、高校ん時の制服着用だーー!」
は?

私と祭は目が点になる。

「オタク心を刺激する作戦か、それはナイスアイディアだなーー!」

稀一さんがエラく納得している。

「『ミリックの売上げの傾向としては、うちの店にはかなりマニアッ

クなオタク達が沢山来ていると思われるので、その作戦いいかも知
れないっす」

太郎が賛同する。

「バカがあんたらは…ド変態…死ね…！」
私は叫ぶ。

「死んでやる、舌噛み切つて死んでやるッ!!」

祭が顔面蒼白で叫んだ。

「わあ、制服なんて何年ぶりかしら~」
苑子さんだけはウキウキしながら言った。

なんで着る気満々なんですか、苑子さんは…！

「ま、やっぱ最初からコスプレはハードルが高いからせ、それは追
々やつしていく事にして…とりあえず女子は毎日!!ニース力着用つて事
でどうかな?」

咲真さんが笑顔で提案する。

何マジメな顔でバカな提案してんの?この人。
でも一瞬だけ『ああ良かつた、单なるスカートならまだましか』つ
てホツとしてしまった自分に驚いた。危ない危ない…まんまと作戦
に引っ掛かる所だった。

「賛成の人、挙手…！」

稀一さんが手を挙げると、男全員手を挙げた。
あーバカだバカだ。バカばっかりだ。

私は二コニコしながら挙手してるバカ共を呆れた顔で黙殺した。

もう一人、笑顔で手を挙げている苑子さんを見て、私は静かに首を
横に振った。

苑子さん…あなたつて人は
大きく1つため息をついた。

?

次の日。

「おー！…いいねえ苑ちゃん。美脚だねえ」

稀一さんは、手で四角を作りカメラマンの真似をしながら苑子さんを褒めている。

苑子さんも、慣れた感じでポーズを取っていた。

いつも苑子さんは長めのふんわりしたスカートを穿く事が多いが、今日は言われた通りの膝上の短いスカートを穿いている。

でも、やっぱり苑子さんは足が細くてキレイだからどんなスカートでも凄く似合うのが羨ましい。

私はしばらく苑子さんのスカート姿に見入っていた。

「お前、スカート履いてんのに仁王立ちすんなのやめとけよ」
太郎が私の背後から声を掛けた。

私は慌てて足を閉じると、クルッと後ろを振り向いて
「見ないでよ！…ど変態！」

太郎の頭に空手チョップをした。

「痛つてえ！！」

太郎は頭を抑えた。

「何すんだよ急に、痛つてえな…。しかしあれだな。

お前よくもそんな凶太い脚してスカート穿いてこれたな。
ある意味お前…侍だよな。その勇氣ある行動と無謀さを称え、今日
からお前も俺と同じラストサムライと名乗る事を許可する…」
太郎は私の肩をポンポンと叩くと、右手の親指を立てて「イエーイ

と呟いた。

「…結構です。」

私は太郎のおでこを思いつきりグーで殴つてやつた。

太郎は余りの痛さに、おでこを抑えながらその場につづくまつた。

何がラストサムライだ。そんなん名乗りたくないわ！…ってか、図太い脚という意味が全く分からぬ。

私は、一人黙々と雑誌を並べ始めた。

まさか昨日の提案が本気だったとは思つてもみなかつた。

昨日家に帰つてから、稀一さん達から『明日は短めスカート着用』という内容のメールが来て、全てに「嫌です」と返信したのだが、こつちが了承するまでしつこくストーカー並みにメールが届き、

無視したら今度は電話攻撃が始まり、電源を切つたら更に今度は家電に掛かつてくるといつしつことに、家族への迷惑と眠さの限界に達してしまい

「分かりました」と返事してしまつた。

元々スカートはあまり穿かないのと、お姉ちゃんのを借りて穿いてきたのだが、お姉ちゃんは私の幼児体型とは違つてスタイルがいいから、ウエストが少しきつめなのが凄くムカついた。

私は無意味にお腹を凹ませてみる。

こんなスカート穿いたぐらいで、客が増えたらわけないって話だ。

私はふて腐れた。

「お前、俺のスカート作戦をバカにしてるな?」

稀一さんが私に話しかけてくる。

いつから、あなたの作戦になつたのでしょうか。つてか、店長がこんなチンケな作戦を俺の作戦などと自慢げに言つのつて如何なものでしょうかね。

「…別に。」

私は稀一さんを軽蔑の眼差しで見つめた。

「とにかく、11時と2時は脚立に登つて無意味に展示物の貼り替えタイムにしよう!」

「イイツ、またまたバカな提案をしやがつたな。
このスカートで脚立に登れど?」

「イヤイヤイヤ、ムリムリムリ、ムリですって稀一さん」

私は首を超高速スピードで左右に振った。

「こんなスカートで脚立なんかに登つたら、パンツ丸見えになるじゃないですか…!」

「そう…!題して、パンチラ作戦ならぬ、パンツ丸見え、略してパン丸作戦…!…!」

「バカですか、稀一さんは…!…!」

「一応有名大学は出たよ」

「そういう事言つてるんじゃないんです…!…!」

ホント、この人上に立つ資質があるのだろうか。私は力なくため息をついた。

「稀一さん、客にパンツを見せる店なんて、そんなの本屋じゃないですよ！？そんなのいかがわしい店のする事じゃないですかっ！！青少年指導センターに通報されますよっ？」

「ウソウソウソ、ウソに決まってるじゃん～」
稀一さんは笑って言つた。

「なんだジョーダンか…」
私はかすかにホッとした。

「丸見えはさすがにマズイから、やつぱチラリズムを追及した方がいいよな！！

見えそうで見えなそうで…やつぱ見えそうで、つていうギリギリの所が逆にそそるつていうかさあ、なあ、沙和」

あああああ…
やつぱり、相当な類まれないアホだ。

「稀一さん、やつぱう～」

ふと声をする方向を見ると、苑子さんが脚立に登つて手を振つている。

「ハッ…！」
私は吹きだした。

苑子さん、なぜあなたって人はノリノリでそこまで出来るんですか！？

世間知らずのお嬢様つて、ある意味汚れてない分純粋過ぎて怖いです…。

苑子さんは、見えそうで見えないギリギリの所で脚立に乗っていて、ある意味プロ級だ。

稀一さんは、苑子さんの所に走つていくとまたカメラマンの真似をして

「いいねいいね～！～！」の見えそうで見えないもどかしさ～いやーそそるねえ！グッジョブだよ、苑ちゃん！グッジョブ！…」

四方八方からカメラを撮る真似をしながら苑子さんを眺めて褒めまくった。

果たしてこの作戦が吉と出るか凶と出るのか。

私ははしゃぐ2人を見ながら更に深いため息をついた。

「女どもばかりに努力させては男が廢るつてもんだよな」

「だな、俺らもなんか考えようか」

青登と咲真が店内の片隅に置いてある作業台の所で話し合っていた。

「うちの店はわあ、男の客は結構来るんだよな。お前何時間うちの店いる気だよ？つて聞きたくなるような客が多いしなあ。まあ、買つてくれるんなら何時間居てもいいんだけどさあ」

青登が発注書にいたずら書きをしながら言つ。

「だからさ、一番うちの密層として低い成人女性密…といつか、子連れの密とかはどうしてもショッピングモールの方に行っちゃうからな…」

で、ついでにそこに入ってる本屋で本を買っちゃう訳じゃん？だから、その人達を何とかして、うちの店に引き込めるかがポイントになるよな~」

咲真の意見に、青登が何かを思いついたかのようにハツとした表情を浮かべた。

「やつぱり今、子供達に大人気と言えばヒーロー戦隊モノだら…！お母さん達をも虜にしてるというイケメン俳優達…！それを利用すれば子供とお母さん、一気にゲットできるぜ…！」

「この田舎の本屋にビリヤッて連れてくるんだよ、そのイケメン俳優達をさあ」

「バカだな、俺らがやりやいいんだよ…！…だってさ、俺らイケメン俳優なんかに負けないぐらいのイケメンなんだからさあ…！」
本屋戦隊、ブックマン…！…みたいなさ…ビリヤ…これ？」

青登が手を斜めに上げてポーズを決める。

「…本屋戦隊ブックマンって、カッコイイの？…もう少ししひねりなよ。

ホラ、戦隊モノついたら ジャー、みたいなのが定番なんじやないの？」

「そつか……じゃあ、活字戦隊本読むんジャーラー！…つてのはどう？」「本読むんじゃ～って…思いつきりおやじギャグ入ってるよね、それ

咲真が苦笑いする。

「じゃあ、お前も考えろよ…！俺は結構良いと想ったんだけどなー、本読むんジャーラー！」

また青登が片手を挙げてポーズを決める。

「やうだな…活字戦隊、はいことして…活字戦隊、新刊ジャーラー！…つてのはどう？…！」

咲真も同じようなポーズを取る。

「シンカンジャーラー！カツコイイよ、咲真…超ナウイよ…！イケてるよ…！」

田をキラキラさせて青登が咲真の手を握る。

「ナウイは死語だけどな。よし、これで決定だな青登…！」
2人見つめあって頷いた。

「で、言ひだしつペの俺がシンカンレッドでこいよな

青登が笑顔で言つ。

「は？お前はどう考へてもシンカンブルーだろ？名前に青の字が入つてゐんだからさ。」

「名前なんか関係あるかよ、俺は絶対レッドがいいんだよ

「レッド役は、高身長の俺がやることによつて全体的にまとまりが出来て見栄え的こみくなるんじゃないか」

「身長なんか俺と大差ねーだろうが。いいか?ブルーは結構クールな奴が多いんだ。どう考へても、俺という人間にクールなんて形容詞は当てはまらないじゃないか、そ娘娘う?」

「そうだな。お前はどう考へてもお調子者のイエローって感じだな」

「バカ言つなよ、イエローは確實に沙和つちだろうが。」

「あーうんうん、納得」

また2人は頷き合つた。

私は、隅の作業台で何かしら手を挙げたり握りあつたり頷き合つている青登さん達をレジから胡散臭そうに見ていた。

一体、あの人達は何をやつっているんだろうか。
マジメに仕事しているとは到底思えない。
また変な事を考へているのではないだろうか。

あの2人が考える事が、マトモだった試しは今まで一度もない。妙な悪寒が身体中を駆け抜けて、思わずブルブルッとした。なんか嫌な予感がするんですけど…気のせいだろうか。

私はずっと2人の姿を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8446z/>

単なるブックス未来屋酒田店

2011年12月27日22時48分発行